

『空手術之研究』から読み解く和道流空手3つの極意

山下 明 博

Three Essential Points of Wadou-ryu Karate by “Study of Karate-Jyutsu”

Akihiro YAMASHITA

はじめに

財団法人全日本空手道連盟¹⁾を構成する四大流派²⁾の一つである和道流空手は、音で表現したとき、「ビシッ」「バシッ」「ズバッ」といった「空手」の一般的なイメージとは異なり、「パッ」または「サッ」というイメージに近い空手であり、他の流派とは趣きを異にする。

筆者は、和道流空手の創始者である大塚博紀³⁾氏の最初の刊行物である「空手術之研究 第一部 形之部」(大塚1950)(以下、空手術之研究と略す)の現代語訳を試みたI氏の協力を得て、和道流空手の修行時に、何に留意すべきかを考察した。その結果、和道流空手の極意が、「(和やかな)気持ち」、「(脱力による、タメのない)敏捷性」、「身体の(中心の)感覚」の3つであることが明らかになった。

本稿は、「空手術之研究」から和道流空手の3つの極意を明らかにすると共に、それを通じて、現在および未来の和道流空手の発展、および和道流空手以外の武道界、武術界の研究、発展に寄与することを目的とするものである。

I. 和道流空手の特徴

「空手」は、一般的には、「豪快」「重厚」「いかつい」「力強い」「たくましい」等のイメージを持たれることが多い。また、これを音で表現すると、「ビシッ」「バシッ」「ズバッ」といったイメージになる。

ところが、和道流空手は、そのイメージとは趣きを異にする。和道流空手の動きは、「パッ」または「サッ」という音のイメージに近い。そのため、和道流空手の修行者の中には、その不安

-
- 1) 財団法人全日本空手道連盟は、昭和39年、日本の空手道に統一的な秩序をもたらすことを目的に結成された法人である。日本体育協会への加盟および国民体育大会への参加等により、国民体育の一環としての空手道の地位確立、および、試合制度の整備や競技ルールの改良等、空手道の発展のための環境づくりを行ってきた。
 - 2) 空手の四大流派とは、剛柔流、糸東流、松涛館流、和道流の伝統派空手流派を指す。
 - 3) 大塚博紀氏は、和道流空手の創始者である。1893年に茨城県で生まれ、1982年に没するまで、空手の発展に尽くした、昭和期を代表する空手家の一人である。近代空手の父である船越義珍に入門し、1938年に、自身の流派である「神州和道流空手術」を創設した。これが、後の和道流空手となる。1950年に、「空手術之研究」を著した。

定な立ち方、バランスを取りにくい立ち方、不自然な立ち方、力の入りにくい受け方、フワフワした感じ、頼りない感じ、簡素化された形の動き等に、入門前の空手に対するイメージとの違いや物足りなさを感じる者もいるという。

また、和道流空手の形は、他の流派の形と比較して、「力強さがない」「重厚さがない」「動作があっさりしている」「強弱がない」「緩急がない」「見栄えがしない」と評価される。

それ故、和道流空手の修行者の中には、「果たしてこれで良いのだろうか?」「自分は強くなっているのだろうか?」「強くなれるのだろうか?」と疑問に感じながら修行をしていることも多いと思われる。

Ⅱ. 「空手術之研究 第一部 形之部」現代語訳

I氏は、2005年12月、全日本空手道連盟和道会広島県本部長の城本正昭氏⁴⁾に、東大空手部⁵⁾の指導をされた大塚博紀氏の著書である『空手術之研究』の入手を依頼され、同書に出会った。そして、全日本空手道連盟和道会広島東支部で篠原正道氏⁶⁾に師事した際に、篠原氏の修行研鑽の一助にと考え、I氏自身の研究も兼ねてクーシャンクー⁷⁾の現代語訳を試みた。ところが、「ピンアン何段⁸⁾の第何拳動と同様」といった表現が頻出し、結局は最初から全て現代語訳をしてみないと正確に理解できないことが分かり、2007年1月から約半年間をかけて、旧字体漢字および旧仮名使いで記述されていた同書の現代語訳を行った。

そこで、筆者は、I氏の協力を仰ぎ、同書に述べられている、和道流空手創始者大塚博紀氏の考え方を明らかにし、修行事に留意すべき点を考察することにした。

Ⅲ. 和道流空手上達のための3つの極意

「空手術之研究」の現代語訳によると、和道流空手の修行における留意点として3点が浮かび上がってきた。これらは即ち和道流空手の極意でもあり、修得することを明確に意識して練習することが重要であると考えられる。

極意1：和やかな気持ち

大塚氏は、まず、「和やかな気持ち」でいることを重視し、「空手術之研究」の中で次のように述べている。

「身も心も極めて自然に和やかな気持ちで立つ。」(ピンアンの形 立ち方)

「両腕を張って肩を怒らせたり下腹に力を入れたり眼を怒らせたり如何にも剛壮な構えを

4) 城本正昭氏は、2005年当時、全日本空手道連盟和道会広島県本部の本部長であった。

5) 東京大学空手部は、1925年に創設された、全国の大学空手の中で2番目に古い歴史を持つ部である。1934年には、三代目師範として、和道流創始者である大塚博紀氏を迎え、長きにわたり指導を受けた経緯がある。

6) 篠原正道氏は、全日本空手道連盟和道会広島東支部の代表であり、和道会全国大会形の部で優勝経験のある和道会きっての形の名手である。

7) クーシャンクーは、全日本空手道連盟の第二指定形に指定されている、和道流空手の形の一つである。

8) ピンアン(平安)は、空手が学校教育に採用された際、生徒たちが学習しやすいように、糸洲安恒氏が創作した形である。ピンアン初段からピンアン五段まで、5種類の形がある。

しないこと。」(ピンアンの形 用意の姿勢)

これは隙を生じさせないためである。両腕や下腹に力を入れていると、敵の攻撃を受けた際に対応することができない。仕事上や日常生活の中でも気持ちに余裕がないと、様々な出来事に即応できないのと同じである。いつ何時でも心身の力を抜き、平和を重んじ、来るものに対して千変万化し、いかようにでも対応できるように訓練することが肝要である。

しかし、空手に対する一般的な先入観はかなり浸透しているようで、和道流空手の修行者の中でも、ベテランから小学校低学年に至るまで、いかにも「今から形の演武を開始します」という格好をし、「用意」の段階で力んでいるのを目にする。

「和やかな気持ち」であるかどうかは一般的には個人の人格の問題とされることが多いが、大塚氏はこれを和道流空手の技術の一つとして位置づけている。

この「和やかな気持ち」は形の最中も常に維持しなければならず、大塚氏は、以下のように述べている。

「力を残すことなく気持ちを和やかに持つのである。」(ナイハンチ⁹⁾ 第3挙動)

「自然の立ち方と何ら変わらない楽な気持ちであらねばならない。」(ナイハンチ 第11挙動)

「それには気持ちを柔らかに持つことである。」(ナイハンチ 第16挙動)

また、形が終わり、「用意」の姿勢に戻る際も、注意点として以下のように述べている。

「用意の姿勢に戻るときも両肘を張り肩を怒らせ如何にも力の籠(こも)った格好をしないことは用意の姿勢をとるときに注意に同じである。体操が終わった時の動作ではないのだから気合を抜くことなく、そして静かに和やかな気持ちで引くこと。」(ピンアン初段 第25挙動)

これが和道流の「残心(ざんしん)」であり、特徴である。

和道流空手の形に「気合い」がないのは終始「和やかな気持ち」を保つことを重視しているためであろう。

次の解説に、大塚氏の武道に対する考えが最も良く表現されていると考える。

「武道本来の精神は平和を愛しこれを促進するのであって世の中を円満に又自分の心も円満に保つ意味を象徴するものである。だから円くなだらかなに行わねばならない。」(クーシャンクー 第1挙動)

極意2：脱力による、タメのない敏捷性

大塚氏は、次に、「力強さ」ではなく、「敏捷性」「スピード」「軽快さ」を重視している。これらの点は『空手術之研究』のほとんど全ての形の解説において強調されており、それは、物理学を用いて次のように述べられている。

「スピードを早くすること。そのためには当る瞬間以外には絶対に力を入れないこと。物理学における力積の法則によっても解るように体全体で当ることとスピードが最も肝要なことである。」(突きの種類)

この「力積の法則」は

$$\text{運動量} = \text{質量(重さ)} \times \text{速さ(スピード)}$$

9) ナイハンチは、和道流空手の形の一つである。

という式で表される。

質量（重さ）は自分の体重以上にはならないのであるから、運動量をより大きくするためには速さ（スピード）をより速くする必要がある。また、質量（重さ）の最大値は体重であるが、力を入れると体の動きにブレーキがかかり、いわゆる「手打ち」となり、この場合の質量（重さ）は拳の質量（重さ）にしかない。

仮に、体重を50kg、拳の重さを0.5kg、突きのスピードを毎秒5メートルとすると、体の動きにブレーキがかかった所謂「手打ち」の場合、

$$\begin{aligned}\text{突きの衝撃} &= \text{拳の重さ} \times \text{突きの速さ} \\ &= 0.5 \times 5 \\ &= 2.5 \text{ [kg} \cdot \text{m/s]}\end{aligned}$$

である。

これに対し、体全体で当たる場合は

$$\begin{aligned}\text{突きの衝撃} &= \text{体重} \times \text{突きの速さ} \\ &= 50 \times 5 \\ &= 250 \text{ [kg} \cdot \text{m/s]}\end{aligned}$$

となり、「手打ち」の場合の100倍の衝撃の突きを繰り出すことが可能となる。

そして体全体で当るためには、力を入れると体の動きにブレーキがかかるため、逆に「絶対に力を入れない」ようにする（脱力する）必要がある。

和道流の形に、いわゆる「タメ」がなく、他の流派の形と比較して「力強さが無い」「重厚さが無い」「動作があっさりしている」「強弱がない」「緩急がない」「見栄えがしない」と評価されるのはこれが理由であると考えられる。

また、「強く」という表現は「空手術之研究」の中で、引き手の説明や相手を引き込む動作の説明では使われているが、「立ち方」に始まり「突き」「蹴り」「受け」の動作そのものの説明では一度も用いられていない。相手に与える衝撃の要素は「（脱力によって得られる）最大の質量」と「（脱力によって得られる）最高のスピード」のみであり、それ以外の要素は阻害要因だからである。

以下に、「空手術之研究」の中の「敏捷性」に関する部分を引用する。これらの記述から、大塚氏は、「敏捷性」を極めて重んじていることが分かる。また、「パッと」や「サッと」といった表現からは、脱力していること、タメがないことが伝わってくる。

「急がずに敏捷にそして一手一手がはっきりと極（き）まらねばならない。」（ピンアン初段 第3挙動）

「無駄がなく且つ敏捷な技を使う」（ピンアン初段 第7挙動）

「思う方向に思う姿勢で完全にそして敏捷に極まる動作が熟達するよう」（ピンアン初段 第12挙動）

「パッと体をかわす体の力で上段受けを行う」（ピンアン三段 第1挙動）

「転換は敏捷に猫足先は正しく前方を向くこと。」（ピンアン三段 第4挙動）

「一手一手をしっかりと極め連結して敏捷に行う。」（ピンアン三段 第11挙動）

「別の敵に対する気持ちでパッと変化対応するように」（ピンアン四段 第7挙動）

「体で軽く敏捷に行うこと。」（ピンアン四段 第12挙動）

「敏捷軽快にしかも各動作が極まらねばならない。」（ピンアン五段 第12挙動）

「パッと体を引くのと打ち払うのが同時に」(ピンアン五段 第14挙動)
 「後方の敵の顔をパッと見るように」(ピンアン五段 第17挙動)
 「身を軽捷にする動作でもあり」(ピンアン五段 第18挙動)
 「四方に且つ敏捷に変化動作するよう」(クーシャンクー)
 「敏捷に且つ四方に変化する」(クーシャンクー)
 「一手一手が正確に変化がはっきりと然も敏捷でなければならない。」(クーシャンクー)
 「即応してパッと敵の攻撃を瞬間的に流すや否や攻撃する」(クーシャンクー 第17挙動)
 「パッと振り返り敵に眼を注ぐと同時に体を落とすのである。」(クーシャンクー 第17挙動)
 「体をパッと落とせば右腕もその位置からパッと構え瞬間的に体に変転し気合が一致し動作が俊敏に姿勢がピタッと極まる。」(クーシャンクー 第17挙動)
 「正確に敏捷に」(クーシャンクー 第19挙動)
 「足で飛び下がらず体をサッと飛びずさること。」(クーシャンクー 第37挙動)
 「体で体を支える気持ちで動作すると敏捷に軽く出来る。」(クーシャンクー 第40挙動)
 「連結して敏捷に動作を行う。」(クーシャンクー 第41挙動)
 「上段受けをした両手刀に力が残ると体の運びが軽快に極まらない。」(クーシャンクー 第57挙動)
 「体の動作の軽捷を練磨する。」(クーシャンクー 第59挙動)
 「顔は左方の敵に対する気持ちでパッと向けること。」(ナイハンチ 第10挙動)
 「後半は内輪立ちを利用して敏捷に行う。」(セイシャン¹⁰⁾)
 「前半で基礎的に鍛えた動作を後半で軽く応用して動作する。」(セイシャン)
 「諸種の操作を軽快に行う応用動作である」(セイシャン 第16挙動)
 「体全体をパッと軽捷に転換する。」(チントウ¹¹⁾ 第6挙動)
 「チントウ本来の形の性質から見て軽捷な払い受けの動作の練習を行う」(チントウ 第12挙動)
 「敏捷軽快に操作するが一々極まらねばならない。」(チントウ 第25挙動)

極意3：身体の中心の感覚

大塚氏は、身体感覚に重きを置いて練習することを重視されており、「空手術之研究」において、身体感覚に関する解説が多く記述されている。

「体全体の力で突くこと。」(突きの種類)

「突くも蹴るも受けるも立つも歩くも回るも凡ての動作は四肢で動作するのでなく体で動作を行う。つまり体で突き、体で蹴り、体で立ち体で歩き、体で回るようになればよい。この気持ちは到底筆で表現することは不可能である。練習を積んで体得してもらおう外はない。」(体で動作すること)

「形は諸種の個々動作が相手なしに独習できるように組み立てられたもので、形全体を通じて一貫した連絡動作と考えないのがよい。そうでないとピンアン二段の第3挙動の場合

10) セイシャンは、全日本空手道連盟の第一指定形に指定されている、和道流空手の形の一つである。

11) チントウは、全日本空手道連盟の第一指定形に指定されている、和道流空手の形の一つである。

のような矛盾が起きる。併しピンアン二段第2挙動の動作を例にとれば相手の突きを充分に引き込むことと後ろ回りして方向転換しても体の構えが崩れないことを主目的として動作をするのであるが、従の目的である下段払いはいはやはり敵が蹴ってくるという気持ちで受けなければ、受ける動作が死んでしまう。だから練習の過程としては常に相手を想像すると共に、動作の目的を外さないことが肝要である。」(形について)

「左方からの攻撃に対する受けと考えること。」(ピンアン初段 第1挙動)

「この動作の主目的は腰の捻りと両腕の同時操作にある。」(ピンアン初段 第2挙動)

「なるべく頭部を打つ練習をすること。上部を打つと肩に力が片寄り腹の力が抜けて体が浮き右肘も充分後方に引けず後ろ斜め後方に引きがちになる。どこを打っても力が片寄らないよう注意すること。つまり体で打つのである。」(ピンアン初段 第3挙動)

「斜め後方からの敵の攻撃を受けると思わないこと」(ピンアン初段 第12挙動)

「方向転換は形の連繫上と、又思う方向に思う姿勢で完全にそして敏捷に極まる動作が熟達するよう前後左右或いは斜め方向に種々の払い受け方と共に立ち方をとる練習方法が左右交互に仕組まれてあると解すべきである。」(ピンアン初段 第12挙動)

「足で歩いて手で受けず、体で歩いて体で受ける」(ピンアン初段 第20挙動)

「足で足を戻さず体で体を戻すこと。」(ピンアン初段 第25挙動)

「左側方からの敵の中段突きを受けると解さないこと。」(ピンアン二段 第1挙動)

「この動作を後方からの敵の蹴りに対する下段払い受けと解するのは誤解も甚だしい。そう解するならばそのまま左回りして後ろ向きになると同時に左下段払いをする法が合理的である。形は前述の通り左右平均して連続練習し易いように組み立てられ体の変転動作と攻防の手足技法との基礎動作の混合形体である。形の内の一技がそのままそっくり敵の攻撃に対する防御、敵への攻撃たり得ると解すると随分と無理がある。目的は飽くまで基礎にある。この動作は思う方向へ思う体形に転換してもそれが完全に出来るように練習するために後ろ回りして方向を転換し併せて受けの練習を兼ね行くと解するのが妥当である。」

(ピンアン二段 第3挙動)

「体も真正面向きになるよう充分に転回するのがよい。半身で受けても差し支えないがその場合でも猫足先は正しく前方を向いて極まらなければならない。だが体の転換を充分に練習するため真正面向きとなる方がよい。」(ピンアン三段 第4挙動)

「体を開き敵の突きを避けるのでも亦肘で払い除けるのでもなく体を開く動作が肘で払い、肘で払う動作が体を開くので腰の動作つまり体で動作するのである。この「コツ」を味得するまで充分練磨することが肝要で応用動作は皆この「コツ」の活用過ぎないのである。」

(ピンアン三段 第13挙動)

「常に体は柔らかにしかもしっかりとして力の中心が腹から離れないことが肝要である。」

(ピンアン三段第16挙動)

「上段でも下段でも体の力で動作を行い力の中心が常に腰にあるよう特に肘を水平にして練習をするのである。抱き付いた敵の顔を突くと解さないのがよい。」(ピンアン三段第17挙動)

「飛び込んだ時右膝が伸びて体が高くなりふらつくのはやはり足で飛び込み足で立つからである。体で飛び込み体で立つこと。」(ピンアン四段 第12挙動)

「後方の敵の顔をパッと見るように体で動作すればよい。」(ピンアン五段 第17挙動)

「この形は体の転換に主要目的をおいて練習すべきである。」(クーシャンクー)

「足で動作せず心で動作すれば自然に体が動作をするのである。」(クーシャンクー 第17挙動)

「体で体を支える気持ちで動作すると敏捷に軽く出来る。」(クーシャンクー 第40挙動)

「後方へ振り向き飛び込んで払い受けるのであるがこれを後方からの敵の突きを受ける技と解さず、方向転換と同時に継ぎ足をしつつ猫足を極める練習動作を主目的と解し、正面向きのまま受けを行うのがよい。」(クーシャンクー 第45挙動)

「足で立つのではなく体で立つ気持ちでなければならない。例えば腰を掛けている椅子が楽に引き抜けるように又抜かれてもそのままの状態に体が残っているように腰で体を椅子に支えるのでもなければ足で体を支えているのでもない。体で体を支えている気持である。この気持は練磨を積んで味得する外はない。」(ナイハンチの立ち方)

「足に力を入れてはならない。全て腰で動作するのである。それで前述のように練習の過程においては時に足を締めて崩さぬようにするのも一つの練習の方便である。特に力を入れて締めるのは飽くまで方便であって決してナイハンチの立ち方本来の容ではない。」(ナイハンチの立ち方)

「やりにくい操作で特徴の立ち方を崩さないよう練習するのである。」(ナイハンチ 手技を高い位置で行うこと)

「上体を右へ捻って上体を正しく保ち下体は勿論崩すことなく力は何処にも偏在せず又楽な姿勢にあること。それには力を残すことなく気持ちを和やかに持つのである。」(ナイハンチ 第3挙動)

「体を柔らかに保てば姿勢は正しくなる。」(ナイハンチ 第4挙動)

「斜方向に突いても右肩が前に出ないように腰をしっかりと据えて突く。それは腕で突かずに体で突かねばならない。体で突く練習のために高い位置で斜方向に突くのである。」(ナイハンチ 第6挙動)

「この動作は足払いの動作ではなく特殊な立ち方であるから慣れないと脚に力が入り窮屈な感がある。自然の立ち方と何ら変わらない楽な気持ちであらねばならない。それで脚に力が入っていないか、又楽な姿勢であるかを試みるのが目的であるから裏の見える程度に足を返して出来るだけ高くしかも軽く挙げ軽く戻して元通り崩れない立ち方に帰らねばならない。右膝を伸ばしたり体重を右脚にかけたりせず軽く早く動作して足音のしないよう軽く戻す。」(ナイハンチ 第11挙動)

「上体を捻る気持ちでなく体を正しく保つ気持ちで戻し極まった瞬間に力を抜く。それには気持ちを柔らかに持つことである。」(ナイハンチ 第16挙動)

「これは腕で操作をするからで体全体の力で突かないといけない。腕の力でなく体の力で突けば力が常に体の中心である腰から放(はな)れないので高く突いても体も傾かず右肘も下がることはない。」(ナイハンチ 第17挙動)

「急激に行わず緩やかに柔らかく然も強く体の全力で行う。腕の力のみで行うと左右両腕の力がとれないために体も曲がり胸を張って恰(あたか)も深呼吸する格好になりがちであるから注意すること。」(ナイハンチ 第18挙動)

「敵の攻撃を警戒しつつ戻す心組みで体で戻す残心を忘れないこと。」(ナイハンチ 第34挙動)

「ナイハンチの形と同様、足で体を運ばず体で進むようにし両足で立ち方の姿勢をとらず腰と両脚で無意識のうちに極まるように修練を積むこと。」(セイシャン 第3挙動)

「脚で移動すると体が波動し動作が鈍る。体を引いて体で回ること。」(チントウ 第5挙動)

「左方の敵に素早く対応する気持ちで体を動作すれば両足の方向、位置もそれに適応して移動するのである。体の土台である両足がそれに適応しなければ体が不安定に、姿勢に無理が生ずる。」(チントウ 第6挙動)

これらのポイントは「楽であること、緊張していないこと」、「相手を想定した突き、受けの動作であっても、その動作を形の中で練習する目的は、体の操作を意のままに意の方向へ行いバランスを保つことにあること」、「手足ではなく体の中心を意識すること」の3点にほぼ集約されるが、これらの身体感覚の養成のために、和道流の形は、敢えて手足に力が入りにくく、バランスが崩れ易いようになっている。

腰を落とし、安定した立ち方を取り、手足に力を入れることにより、身体の表面に近い、大きく太い筋肉群は鍛えられるが、和道流では不安定な立ち方、力の入りにくい立ち方によって、身体の外側の筋肉に頼らずに身体の中心部の筋肉や各関節周りの細かい筋肉を使い、身体感覚、バランス感覚が研ぎ澄まされるように工夫されているのである。

大塚氏は常々、「形はピンアン、クーシャンクー、ナイハンチ、セイシャン、チントウで充分。それ以外の形は多少動作が違うだけで、空手に必要な動作は全てこれらの形に含まれている。」と仰っていたと伝えられている。

以上が、「空手術之研究」に記述されている、「和やかな気持ち」、「脱力による、タメのない敏捷性」、「身体の中心の感覚」の3つの極意である。

IV. 3つの極意の会得

前章で述べた3つの極意について、1つ1つの重要性については既知のこのように思えるかもしれない。しかし、和道流空手では、これら3つの全てを常に同時に行う技術を身につけることが求められている。

また、「和やかな気持ち」、「脱力による、タメのない敏捷性」、「身体の中心の感覚」という3つの技術に共通しているのは、全て意識が自分自身に向いている点である。他者を凌駕するのは和道流空手の技術を修めた結果であり、目的ではない。和道流空手を含め、空手界は空手の普及のために競技化を進めてきているが、飽くまでも競技力の向上は和道流空手の技術修得の過程における手段の一つに過ぎないことを忘れないようにしたいと思う。

そして大塚氏は、これらの技術(極意)を言葉で伝えることは不可能であり、修行者各自が工夫と練習によって自得するしかない、と述べている。

「口伝えにするのさえ困難なことであり、ましてや筆での表現は不可能に近いといわねばならない。全ては修業者の自得に俟(ま)つほかはないのである。」(序)

「流し突き、逆の跳び込み突き、その他種々の突き方蹴り方を工夫独習することが肝要である。」(突きの種類)

「練習を積んで体得してもらう外はない。」(体で動作すること)

「要するに上達の秘訣は工夫と練磨以外にはない。」(形について)

「よく工夫して練習すること。こうした工夫が応用のとき大きな効果を発揮するのである。」

(ピンアン初段 第20挙動)

「この「コツ」を味得するまで充分練磨することが肝要で応用動作は皆この「コツ」の活用に過ぎないのである。」(ピンアン三段 第13挙動)

「要するに工夫研究して少しでもより良い習慣をつけることを心懸けるべきである。」(ピンアン四段 第22挙動)

「よく工夫して練習を積むこと。」(セイシャン 第11挙動)

「よく工夫研磨されたい。」(セイシャン 第12挙動)

「操作は前述で度々繰り返した点をよく味読して工夫練習されたい。」(チントウ 第13挙動)

結 論

大塚氏の直弟子であった柳川昌弘氏の著作によると、大塚氏は当時の「強くなりたい」という目的を持って空手を練習している大学生達に和道流空手の技術(極意)を伝承することを諦められていた、とのことである(柳川2006)が、それは1960年代の様子と推測される。一方、「空手術之研究」は1950年の刊行であり、大塚氏が和道流の技術(極意)を伝承する意図をもって書かれた貴重な文献であると考えられる。

現在、大塚氏を創始者とする和道流空手には、和道流空手道連盟と全日本空手道連盟和道会の2つの団体が存在し、別々に活動と研究を行っている。大塚氏には、和道流空手はこうでなければいけない、という型にはめるような考えはなく、和道流空手が形を変えてどのような発展をしようとも、それはそれで良いという考え方に立っていたかもしれない。

しかし和道流には「和」という文字が用いられており、和道会が2つの団体に分裂し、現在に至るということ自体、自己矛盾である。今後、2つの団体が、和道流空手の創始者である大塚氏の目指された和道流空手の発展を共に歩める日が来ることを切に望むものである。

謝 辞

この論文を著すに際し、「空手術之研究」に関する情報を提供いただきました和道会関係者各位、特に、「空手術之研究」の現代語訳と、和道流空手の修行における留意点の明確化に尽力されたI氏に、厚く御礼申し上げます。

参 考 文 献

- 大塚博紀(1950),「空手術之研究 第一部 形之部」,東京:和道会出版部
甲野善紀・井上雄彦(2006),「武術への招待」,東京:宝島社
財団法人全日本空手道連盟中央技術委員会(2001),「空手道教範 指定形」,東京:ベースボールマガジン社
財団法人全日本空手道連盟中央技術委員会(2004),「空手道教範 第2指定形」,東京:インフォレスト
齋藤 孝(2005),「上機嫌の作法」,東京:角川書店
高岡英夫(2002),「現代武術8つの極意 DSが解く 達人のメカニズム」,東京:BABジャパン
高岡英夫(2005),「身体づかいの常識革命!」,東京:青春出版社

東京大学拳法会, 東京大学空手部 (2005), 「新版・東京大学空手技術研究」, 東京: 文成社
丹羽俊一 (1989), 「和道会 和道流空手」, 東京: 成美堂出版
保江邦夫 (2007), 「武道 vs. 物理学」, 東京: 講談社
柳川昌弘 (2006), 「武道家のこたえ」, 東京: B A B ジャパン

[2009. 9. 28 受理]